

京都御苑ガイドマップ



◆猿ヶ辻

京都御所の東北角は鬼門にあたるため、築地塀の角を欠き、守りに日吉山王社の神の使の猿を祀っている。
幕末の文久3年(1863)5月、この付近で尊皇攘夷派の急先鋒、公家の姉小路公知が深夜に及ぶ朝議を終えて帰宅途中に刺客に殺されるという事件が起きた。刀や手裏剣など現場の遺留品から、薩摩の田中新兵衛が疑われたが、彼は犯行を否認し取調べ中に自刃した。薩摩藩に対する長州藩など他藩の策略とも伝えられ、真相は不明である。



◆橋本家跡

文久元年(1861)、公武合体の象徴として徳川家第14代将軍家茂に降嫁した孝明天皇の妹、和宮親子内親王の生誕地であり、母の典侍橋本経子の実家、権大納言橋本實久の屋敷跡である。和宮は有栖川熾仁親王との婚約を破棄し家茂に降嫁が決まるまでこの地で過ごされた。又、家茂亡き後は徳川家存続の為天璋院と共に大政奉還に尽力されたが、錦御旗の下東征大総督として江戸城に向かったのは皮肉にもかの熾仁親王であった。

◆堺町御門

葵祭や時代祭の京都御苑出発点でお馴染みの堺町御門は、幕末の文久3年(1863)勃発した大事件の舞台となった。
過激な討幕派の長州藩と公武合体派の薩摩・会津藩が対峙し、その結果長州藩が敗れた。この門が有名な三条実美等の「七卿落ち(8.18政変)」を演出した場所である。
今では多くの市民や観光客が往来する威風堂々とした佇まいを誇るこの門を訪れ、往時に想いを馳せてみるのも一興である。

◆凝華洞跡

江戸時代初期に、退位された第111代後西天皇の仙洞御所跡と言われている。幕末に京都守護職に任ぜられた会津藩主松平容保が、元治元年(1864)の禁門の変の際この地に仮本陣を置いて総指揮をとり、会津軍は苦戦を強いられたが、ここに据えられた15ドイム砲で長州軍を砲撃、敗走させた。傍らに亭々と聳える大銀杏の堂々たる姿に、幕末の混迷期に信義に生きた若き武将の勇姿が重なって見えるようである。

◆橋本家跡

◆猿ヶ辻

◆凝華洞跡

◆堺町御門

今出川通

丸太町通

◆清水谷家の棕

幕末の戦いを記憶にとどめる棕の木、御苑の西側の苑路に立ちだかっているこのムクノキの誕生の物語は、神秘的である。
清水谷家はかつて吉田村(現左京区)に居住した。その地からこの地にうつられる時に、吉田神社の屋根に芽生えたムクノキをこの地に神木として植えたものである。ムクノキはニレ科の落葉高木。葉は木地やべっこうの研磨材に使われ、材は弾力性に富むことから斧の柄や天秤棒などに使われる。秋に熟す実は小さくて黒く、ムクドリが好んで食べるので木の名前の由来になったとも言われている。

◆清水谷家の棕

■都草抄

平安時代の天皇のお住まい(内裏)は現在の御所の約2km西の大内裏の中にあった。その内裏が落雷や失火で焼失すると貴族の邸宅などに移され里内裏と呼ばれた。この里内裏のひとつの土御門東洞院殿が今の京都御所である。
南北朝時代の元弘元年(1331)北朝の光厳天皇がここで即位されて以降明治2年(1869)まで御所とされた。現在の京都御所は平安京の内裏そのままではないが主要部分である紫宸殿、清涼殿などは如実に再現されている。南北約450m東西約250m面積約11万㎡、築地塀と御溝水をめぐらした広大なたたずまいは、内部の調度品とともに王朝時代のみやびな生活をしのばせている。



烏丸通